

山口県錦川流域方言状態の方言地理学的研究

藤 原 与 一

はじめに

○本研究は、山口県周防東部の、岩国市に流れ出る錦川の流域の方言状態を観察して、言語の伝播方式、ないしは言語伝播の理を追究しようとするものである。

○錦川流域方言状態の調査は、昭和四十二年十二月二十四日二十五日と、昭和四十四年三月一日二日三日とで完遂することができた。当時、私は、広島大学大学院修士課程の演習にもたずさわっており、四十二年には、言語地理学を課題としていた。そのため、十二名の学生諸君とともに、四十六地点を調査することができ、ついでは、四十四年、七名の有志諸君に、四十二地点を補足調査してもらったことができた。以上によって、錦川流域の、三十戸以上の集落は、全部、調査し得た。

調査結果を取りあげての、分布図製作では、四十二年度には、十二名の諸君がその作業を分担した。四十四年のものについては、江端義夫、来田隆、早川勝広、沼本克明の四君が整理にあたってくれられ、四十二年度の製図に、適宜、補充調査分の記入を完了してく

れられた。^{注3}

製図に関して、おことわりすべきことがある。分担製図・分担補記、ともに当該分担者単独の作業である。そこに、合議の制度は設けられなかった。この点に難がある。

○なぜ、私は、この錦川流域を問題にしたか。瀬戸内海域方言状態の解明にしたがうにつれ、私は、より狭小の地域について、そこでなりの言語伝播方式を追跡してみたくなくなった。

瀬戸内海域は、多島の群がりあう、興味ぶかい対象地域である。そこには、言語伝播上の、注目すべき事実・事情が、さまざまに見いだされるありさまである。そのことを、ほぐしきるがために、私は、一・二の見本地域で、はっきりとしたケース・スタディーを試みてみたかった。早くも錦川地域を問題としたのは、そのためである。

ともに問題としたかった、いま一つのだいたいな地域がある。それは、徳島県下の吉野川流域である。この流域がまた、吉野川中心に観察しうる、興味ぶかい対象地域である。下流から上流に、またその中流以上の各所での左右の地域に、言語伝播の、追跡しやすいあ

りさまがたどられそうである。

私は、これらの特定地域を問題にして、言語伝播の様式的なものととらえ、これにかえりみることをもしつつ、瀬戸内海域での言語伝播の理の解明にしたがうことにしたのである。

錦川流域についての作業と、吉野川流域についての作業との比較研究も、所願とする作業であった。今は、それにおよび得ていないのを残念とする。

その一 錦川流域方言状態の分析

当地域方言状態の調査結果は、百項目百枚の分布図に製せられた。(この百項目は、『瀬戸内海言語図巻』二百四十項目の中から選出されたものである。)

いまこの百枚の図を分類整理してみるのに、おおよそ、以下のような分別が可能である。——ひとまずこれを、静態処理とする。

A 全域分布

まず、調査地域全域に、すこしのまきれもなく、一事象の遍満するものが、いくらか見いだされる。たとえば「地震」を言うことは「ジン」は、単純に全域に分布している。また、「驚く」ことを言う「タマゲル」「タマゲタ」は、単純に全域に分布している。「落雷する」ことを言う「オチル」もまた、全域分布の相を呈している。

全域分布の当然とされることなどに関しては、いまは述べない。

(↓その二)

B 全域に諸事象の混在の認められるもの

大地域ではない当地域にも、集落の比較的多いことも関連して、一項目についても、とかく諸方に諸事象が見られがちでもある。それらがまた、小区域をとって分立するということではなくて、それこれ混在の相を呈しがちである。

文末のよびかけことば、「ネー」と「ノー」とは、まさに全域に混在し、分布を見わたることができない。「井戸」の図にあって「イド」と「ツルイ」とが、全域にわたって混在の様相を呈している。「親戚」の図、「内証金」の図、「松かさ」の図、「おてんば娘」の図もまた、渾態分布の様相を示す。

C 流域下方にまとまりの見られる分布相

「つくし」の図では、「ホーシ」が、流域下方にのみ見られる。「怠け者」の図にあって、「ナエツト」というのが、流域下方に見られ、流域上方の「ノークレ」と対応している。「にわか雨」の図にあって、「スバエ」や「シグレ」が流域下方にのみあり、これに対して、流域上方の広くに「ユエダチ」が見わたされる。「山頂」を言う「テッペン」もまた、流域下方域本位の分布を示すものである。「ソラ」や「ソネ」が、奥地に見いだされる。

「よく働く人」の「シゴトシ」というのは、流域下方本位に分布し、かつ錦川本流筋の上部にも、これが見られる。「やっぱり」の図では、「ヤッパシ」が流域下方に分布し、これからやや離れて上流域にも分布している。

D 錦川本流ぞい分布

「財産家」の図では、「ダイサンカ」が、錦川本流ぞいの、きれいな分布を見せている。「飲みながら」の図では、動作修飾の表現法の一特異形式、動詞連用形重複の「ノミノミ」が、錦川本流ぞい

中心の分布を見せている。「平らな」の図のばあいでは、「ヒラタ
イ」というのが、まさに錦川本流ぞいの分布を見せていて、奥地な
らびに両傍の「ロクイ」との、きれいな対応を見せている。「布、
綿などの焼けるにおい」について言う「コゲクサイ」もまた、本流
すじの分布を見せて、奥地ならびに両傍の「ボロクサイ」と対応し
ている。「〜サンセ」の図では、「オイデ」が、きれいな本流すじ
の分布を見せている。「無賃労働奉仕」の図では、「テツダイ」が、
本流すじの分布を見せている。

E 上流域での両傍の分布

上述の「平らな」の図と、「布、綿などの焼けるにおい」の図と
のばあい、私はすでに、「奥地ならびに両傍」の分布を指摘した。
当錦川流域にあって、本流両傍の深谷域が、相互対照の分布域とし
て注目される。「くすぐる」の図では、本流すじを中心として「ク
スグル」が分布するのに対して、上流域の左右に、「コソグル」の
分布域が認められる。「梅雨」の図では、上流域の左右両辺に、
「ウル」と「セツ」との分布が見られる。（上流に向かって左辺
には、「ウル」。「めだか」の図では、上流域の両辺に、「ネン
バ」と「ケンバイ」とが見られる。（上流に向かって右辺には、
「ネンバ」。「あげるから」の図では、接続助詞「カラ」系が、左
右両辺ならびに奥地に、散布の状況を呈している。「行つろう」
の図では、「イッター」の広い分布に対して、「イツッロー」が、
はしばしの分布を見せている。「言わずに」の図では、「イワント」
の広い分布に対して、「イワズニ」が、両辺の分布を見せている。
「一つずつ」などという「ずつ」の図では、「ヒトツワツテ」が、
本流すじ中心のかなり広い分布を見せていて、奥地と両傍のいくら

かには、「ズツ」が見られる。

F 奥地分布相

「左利き」を言う「ゴンニョ」は、ただに奥地に分布するばかり
である。「かたつむり」を言う「ナメクジ」も、わずかに極奥の一
地に存在している。ちなみに、「オヒメサマ」というのも、奥地左
辺隅に見いだされる。「日照り雨」の「ヒナタアメ」もまた、奥地
のものである。動詞例では、「落ちる」ことを言う「ホロケル」が、
奥地にだけいくらか見いだされる。「いびきをかく」の「ユウチオ
カク」も、奥地左辺隅のものである。「からかう」ことを言う「セ
ガウ」がまた、奥地分布を見せており、これはかなりの広さにわた
っている。「雪が降っている（存在態）」ことを言う「タマツチョ
ル」がまた、奥地だけに見いだされて、興味がふかい。「〜サン
セ」での「キーサンセ（来なさい）」も、奥地周辺に存在している。
「来たのに」での「のに」接続助詞に該当する「ガ」の言いかたは、
また奥地にだけ存在するものである。

その二 分布諸形態に関する動態論的解釈

上述の分布諸形態を総合的に解釈すれば、ほぼ、以下のように、
当地域での、方言分布傾向を帰納することができようかと思う。す
なわち、そのように、「伝播の理」がとらえられるかと思う。

A まず、錦川流域下方地域の分布傾向が把握される。その範囲
に、事象による多少の変動があるのは、当然のことである。

このような下方流域本位の分布は、おそらく、新来の新分布を示
しがちのものであろう。その新分布が、しだいに勢をかみ（上）に

ひろげる。「血統」の図では、「イエガラ」の進入のすがたが明らかである。「嗅ぐ」の図にあつても、下流域分布の「ニオウ」が、まさに進入の姿、勢を見せている。「カム」の上流域分布は、ものより古いことを、みずから語ってはいないか。

「正座する」の図では、下流域に「ヒザマズク」や「エーヒザニスワル」が分布しているが、これは、まさに新来のものである。先にふれた「やっぱり」の図で、「ヤッパシ」の下流域に分布するものと、「ヤッパリ」での上流域に分布するものとの間に切れめがあるのは、下流域のものが上流域に広まるうとして、何かの衝突めいたものを起した結果によることなのではないか。

狭い幅をもって、ものが下方から上方に存在していようと、それが広いはばのものになっていようと、事象が、下方本位とされるものであるかぎり、事態は要するに新入進入と解される。

B 下流域から上流域への事象進入は、やはり、錦川本流ぞいの進入が主勢力であつたらう。

然る地理状態を見て明瞭な、この錦川本流本位の地域である。いっさいの交通は、古来、錦川本流ぞいを主道とするものであつたらう。主道からその左右両傍・両山地に、支道が分岐している。方言事象もまた、通例、以上の本道・支道を通路として伝播してきたことと想察される。

今日、「平らな」の図での「ヒラタイ」の分布をはじめとして、諸図に、かれこれの錦川本流ぞい分布が見いだされるのは、まさに、方言事象が、本流ぞいを早くも主道として分布し得たことを示すものであろう。「末っ子」を言う「オトンボ」が奥地にあり、本流ぞいの広い範囲には、「オトゴ」が見いだされる。このばあいも、

おそらくは、本流ぞいに「オトゴ」が溯及していつて、「オトンボ」の分布を、漸次、浸触したのであろう。「聞かなかつた」の図では、「キカザッタ」に対して、「キカンカッタ」が、まさに錦川本流ぞいの進攻相を見せている。「見せびらかす」の図では、「ヨロコンデミセル」というのが、本流ぞいの比較的下方に見いだされるが、これまた、「ヨロコンデミセル」という、ごくわかりやすい今日の言いかたが、本流ぞいに、進入の勢を見せたものかと思われる。「なくなる」の図での、「ナイヨーニナル」「ナイヨンナル」の分布もまた、単純に、本流ぞいの分布進攻のすがたを見せるものである。

C 本流主道をおおつた事象は、やがてしぜんに、分岐の諸支道をたどつたであらう。

錦川本流の水かさが、しだいに高まっていけば、その水は、しだいに両谷をひたしていく。これと同じように、本流すじの言語事象は、当然に、左右へと分岐の支道支脈をたどつたであらう。一個の木の葉の葉脈をまた見られたい。主脈から諸支脈が、左右にひろがつている。方言事象分布もまた、主脈から支脈へである。(葉での葉脈のだいじさ、それは、今のばあい、当地域での錦川本支流のだいじさである。)

本流すじから、しだいに両谷・両傍に伝播していくものが、伝播の途中でとどまつた時、その段階で両辺に認められるものが、先存の古者である。「イッターロー」に対して、「イツッロー」が、はしばしに認められるとするならば、これはまさに、しかるべき古態の残存であつた。「一つずつ」などの「ずつ」を、「ヒトツワツテ」と言い、それが先述のように、広域を占めるに至っているのは、後

進の「ワツテ」が新勢力を張ったと見るべきだろう。「ズツ」はより古い形として、奥地・両傍に偏在する。「言わず」の図にあっての、「イワント」と「イワズニ」とについても、「イワント」の後進性が認められ、奥地に、古態残存の「イワズニ」が見られるしだいである。

D 主道支道分布の隆盛から全域分布へ。

主道支道を通じて、事象分布が隆盛になる時、全地域は、そのもの一色におおわれることになる。全域分布は、当流域での伝播隆盛の帰結とされる。さほどの広域ではない当地域に、全域分布の傾向が見え、また、事象渾態分布の傾向が見えるのは、もっとも自然のこととされる。

E 全域分布傾向と奥地分布傾向。

本来ならば、錦川の本支流ぞいを経路とした全域分布が可能であるのが、現実には、そうもなっていないのが、この錦川域である。全域分布への発展傾向、あるいは全域分布の勢が、押しとどめられるとすれば、それは、えてして奥地においてであった。つまり、交通のより不便になっていく奥地まで来ると、進攻の新事象も、停滞しがちとなる。このため、「消極的成立の奥地分布」の傾向が生じる。「日照り雨」での「ヒナタアメ」が、奥地に存在するのは、古い言いかたの、奥地での消極的残存というものである。左利き」を意味する「ゴンニョ」にしても、奥地での古態残存と思われる。「落ちる」を言う「ホロケル」が、奥地に存在するのも、古風な一語の、新語には侵されないとどまった残立と考えられる。「からかう」ことを言う「セガウ」がまた、奥地のかなり広い範囲で、奥地分布の傾向をよく表示している。

○ 積極的傾向と言えるものにもせよ、消極的傾向と言えるものにもせよ、上述のような分布傾向がとらえられる。

文法に関する方言事象分布と、事物名称に関する方言事象分布とは、様相を異にする点もあるけれども、双方の分布諸事実は、音声に関する事象の分布諸事実とともに、相補的にはたらいいて、私どもの分布傾向帰納（言語伝播の理の探究）をさそう。

限られた一小流域のことではあるが、このようにはっきりとした好対象流域であるだけに、分布傾向の追跡は、道を得やすいところがある。関東地方の大平原で、利根川流域を問題にするとすれば、それは、かりに困難なしこととなる。山境地帯での流域観察には、作業の容易なところがある。

む す び

錦川流域方言状態についての方言地理学的調査の結果からは、大略、上述のように、伝播の理を帰結することができた。

ことは、一言でおおえば、「むりのないもの」と見られる。地理地形の自然に合致した、当然すぎるほど当然の「言語伝播のしかた」がたどられる。ことはまったく平凡でもある。が、ここに私どもは、確実に、「伝播の理」の合自然性を認めることができる。

——合自然性は、おそらく、言語伝播での、原本的なものである。

(注1) 真砂茂美、米田隆、徳田満穂、岩崎文人、菅原敬三、

田辺健二、山崎宏暉、齊木泰孝、江端義夫、早川勝広、
木村東吉、沼本克明の諸君。

(注2)

山崎宏暉、米田隆、木村東吉、菅原徹三、早川勝広、
沼本克明、江端義夫の諸君。

(注3)

図例を下にかかげる。(『シンポジウム日本語』5「日
本語の方言」△学生社附50頁のp. 205に載せたものを
ここに引く。)

